VOA 英語学習教材に見られる書き言葉と話し言葉の言語的特徴

――選択体系機能言語学の視点から――

水　野　友　貴

Abstract

Characteristic differences between the features of spoken and written language have a decisive effect in making a text what it is in a certain context. There is a temptation to explain these differences only in terms of appropriateness and awkwardness when it might be more explicitly explained by looking closely at the grammatical and lexical features through which meanings are constructed. A functional linguistic perspective would focus on the inseparable relationship between language context and structure, and from there show how particular texts come to be constructed through choices of lexico-grammar. In this paper, the characteristics of an English learning material, *VOA (Voice of America) "Let's Learn English!"*, are analyzed from the perspective of Systemic Functional Linguistics (SFL) theory: register, lexical density, grammatical intricacy, thematic progression, and cohesion. Stress is laid on the importance of making characteristic differences between spoken and written language explicit. In this way, teachers can be given access to a valuable set of tools that will help students to identify linguistic features of spoken and written language, which should open up a way to develop higher levels of English literacy.

Keywords: Systemic Functional Linguistics (SFL), functional grammar, registar, lexical density, spoken language, written language, thematic progression, cohesion

キーワード：選択体系機能言語学、機能文法、レジスター（言語使用域）、語彙密度、話し言葉、書き言葉、主題進行、結束性

1．はじめに

今年の春学期は未曾有のコロナ禍において、各大学は遠隔授業をすることが余儀なくされた。筆者の担当授業（1年生、2年生）では、指定教科書の学習に加え、ウエブサイトを活用した英語学習を採り入れる絶好の機会となった。「英語学習」もしくは「English Learning」と検索するとヒットする膨大な数の英語学習サイトの中でも、米国の Voice of America（以下 VOA）と英国の BBC の英語学習サイトは世界中の英語学習者および英語教育者向けに様々な情報に関するマルチメディア教材を無料で提供しており、最新ニュース、最新トピック、英会話、文法、発音などの各項目別に自律的な英語学習を支援するためのツールが一体化した、非常に優れた英語学習教材を提供している。

筆者担当の授業では、VOA「Learning English」の数々の無料学習プログラムの中から初級レベルの「Let's Learn English!（以下 LLE）Level 1」を補助教材として活用し、日常的によく使われる語彙・表現、基礎文法知識に加えて、米国の歴史、職場、友人関係、食べ物、年中行事などの文化的知識を学習した。LLE（Level 1 and 2）は VOA の言語学習専門家である Jill Robbins 博士によって Language Learning Strategy Instruction（LLSI）を統合したオンライン型のマルチメディア英語学習教材として世界中の EFL、ESL 学習者の自律的学習を支援するために開発された（Robbins, 2018）。また、教師向けにも各レッスンの scope & sequence および learning strategies が準備されており、非常に優れた教材である。筆者担当の受講生からは、「楽しみながら英語学習ができた」、「苦手な英語が好きになった」、「日常会話に応用できる聞く力や話す力が向上し

た」、さらに「教科書の読解力が向上した」などの好反応を多数得ることができた。

外国語教育において文部科学省は「4技能（聞く・話す・読む・書く）のコミュニケーション力強化」の到達目標を掲げており、グローバル化に対応した新たな英語教育改革実施計画（2013年12月公表）では、小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定している。小学校中学年から始まる外国語（英語）の言語活動は主に話し言葉である。高等学校での高度な言語活動（発表、討論、交渉）のために必要な書き言葉の言語能力を発展させるためには、日常会話のインフォーマルな対話的言語である話し言葉の英語と、大学の専門科目や後学の社会生活などのフォーマルで高度に構成された書き言葉の英語の言語的特徴の違いが、その言語が使われる状況やコンテクストと、その言語が構築される語彙・文法の選択に大きく依存することを理解することが重要である。

選択体系機能言語学（Systemic Functional Grammar 以下適宜 SFL と呼ぶ）では、「誰が、誰に対して、どのような場面で、どのような方法を通じて、何について話しているのか」という伝達状況や伝達方法を表す「状況のコンテクスト」と、伝達内容を表す「テクスト」の語彙・文法の言語的特徴の不可分な関連性を様々な分析によって明示することが可能である。SFL 的分析によって、話し言葉と書き言葉の語彙、文法、テクスト構成などの言語的特徴を顕在化することができるため、コンテクストとテクストを関連づけた言語的意識を高め、その場に相応しい会話力の養成だけでなく、アカデミックな上級リテラシー能力の育成へとつながる重要な礎を築くツールとなることが示唆される。本稿では、SFL 理論を鍵概念として、英語の書き言葉と話し言葉の「なんとなく異なっている」と感じるテクストは、特定の状況のコンテクストを具現するための語彙文法の言語資源の選択によって構築されていることを、VOA 英語学習教材における言語的特徴に SFL 的焦点を当てて検証し、英語

教育への応用を考察する。

2．話し言葉と書き言葉に関する先行研究

日本の英語教育における話し言葉の研究では、話し言葉文法を学ぶことは、言語形式への意識を高め、正誤に基づいた規範的規則だけでなく、コンテクストに応じた言語使用能力の育成において有意義であることが示唆されている（山崎，2017）。また、大学 1 年生の日本語を外国語とする学習者を対象とした研究では、意思伝達および文法の正確性にもかかわらず、日本語母語話者にはどこか「座りの悪さ」を覚えてしまう箇所について、学習者の言語的知識の欠如による話し言葉と書き言葉の使い分けの不適切さに起因していることが指摘されている（山本・大西，2003）。さらに、大学初年次教育における日本語の話し言葉と書き言葉に関する研究では、学生は話し言葉と書き言葉を感覚的に区別しているが、実証的かつ体系的に示すことは非常に困難であり、日本人学部生が話し言葉と書き言葉の混在した説明文中の話し言葉を書き言葉に修正する作業において「動詞を名詞化するなど、統語的なレベルでの話し言葉性が看過されやすい」ことが問題の一つとして指摘されている（石黒，2011）。

SFL 理論を応用した多くの言語教育研究においては、話し言葉と書き言葉の違いを認識することは、高学年になるにつれて必要となる、複雑に構成されたテクストのリテラシー能力の育成にとってきわめて重要であることが示唆されている。日常会話における双方的な話し言葉は、学校教育における口頭発表などの言語活動を通して、学校で期待され、高く評価される学問的、また後学の社会で要求される形式的な書き言葉へと発達する。この過程において語彙・文法の選択がどのようにテクスト

全体を形成するために機能しているかを SFL 理論に基づいて分析し、明示することの言語教育における有効性が多くの先行研究によって示されている（Christie, 1985; Halliday & Hasan, 1985; Schleppegrell, 2004; 佐々木，2006a, 2006b, 2009）。

SFL 理論では、各場面で異なる「状況のコンテクスト」を具現する言語使用域（register）は、活動領域（field）・対人関係（tenor）・伝達様式（mode）の 3 つの変動要素の語彙・文法的言語資源を通じて 3 つの意味を同時に解釈構築すると捉える。活動領域では観念構成的意味（ideational）、対人関係では対人的意味（interpersonal）、伝達様式ではテクスト形成的意味（textual）が同時に協働してテクストとして具現される。これら「状況のコンテクスト」の 3 つの変動要素の語彙・文法的選択と連動して解釈構築される 3 つの意味が、同時に協働して「その場面に相応しいテクスト」を構築する。そのため、話し言葉や書き言葉の「感覚的な座りの悪さ」の言語的特徴を顕在化させることによって、学習者の理解を促す手助けとなり得る。Schleppegrell（2004）は、社会言語学、応用言語学、談話分析による諸研究において上級リテラシー能力に求められる「脱文脈性（decontextualization）」、「明示性（explicitness）」、「複雑性（complexity）」、「認知的要求度（cognitive demand）」について、従来の研究では十分に顕在化されていなかった語彙・文法などの言語的特徴を SFL 的視点から分析、検証し、学校教育のレジスターが日常会話のレジスターとは異なった言語資源の選択から構築されていることを示唆している。上級になるにつれて、生徒は学校教育で要求される学問的タスクを解釈構築するための新しい方法を発達させる必要があり、その新しい方法は、語彙・文法の言語資源の選択によって可能となるため、文法知識の重要性が指摘されている（Schleppegrell, 2004）。

3．SFL における話し言葉と書き言葉の言語的特徴

Halliday（1994）は、テクストの意味（解釈）とその効果（評価）を明らかにするための談話分析はテクストとその要素の機能と意味とに目を向けるものでなければならないとし、テクストの言語的側面を明示的な形式で説明すると同時に、テクストが産出される状況のコンテクストと文化のコンテクストの非言語的側面とを関係づける基盤となる文法の重要性について言及している。機能文法は、テクストの語結合における語彙・文法の選択が機能的に「意味」を解釈構築していることを明示することができる。テープレコーダーの発明によって、伝統的には書き言葉の文法を話し言葉の文法として体系化することが可能となり、話し言葉の無意識性（unconsciousness）を一般的な原理とした上で、以下の 2 つの理由から話し言葉の重要性が指摘されている。

> *One is that spoken language responds continually to the small but subtle changes in its environment, both verbal and non-verbal, and in so doing exhibits a rich pattern of semantic, and hence also of grammatical, variation that does not get explored in writing ... The second reason is that much of what the written language achieves lexically is achieved by the spoken language through the grammar (Halliday, 1994; xxiii–xxiv).*

話し言葉の言語的特徴の理解が重要である第 1 の理由は、話し言葉は言語的、非言語的の流動的なコンテクストにおいて意味的変差と文法的変差が連動しているため、主題や情報などのテクスト構成や、時制やモダリティのようなコンテクストの変化に対応するための選択体系のパターンが書き言葉と比較してかなり豊富であることである。また、第 2 の理由は、話し言葉のテクストの意味が語彙よりも文法に大きく依存する

ことによる複雑性が示されているためである。また、話し言葉の特徴の記述がない理論的枠組みでは、言語体系についての貧弱な見解しか示すことができないという観点から、英語の話し言葉に固有の特性（リズム、情報焦点（音調配分）、心的姿勢（音調）に加えて、主題、節複合、モダリティ）についても言及されている（Halliday, 1994）。

また、書き言葉の言語的特徴として、独話的、非対話的、非対面、非コンテクスト依存型、明確な論理的構成などがあり、これらの言語的特徴は、上級の語彙、標準的文法の言語資源の選択によって具現され、文法的複雑性と語彙選択による語彙密度と深く関連している（Eggins, 2004）。書き言葉は、多くの語を 1 つの節に詰め込むため、話し言葉では節として表現されるものが、名詞群に置き換えられる文法的比喩が関与することによって、書き言葉の複雑性の本質的な性質が示される（Halliday, 1994）。次章では、VOA の LLE Level 1の一例における書き言葉と話し言葉の言語的特徴について SFL 理論に基づいて分析し、話し言葉と書き言葉の言語的特徴を考察する。

４．テクスト分析による話し言葉と書き言葉の比較

VOA の LLE では、アメリカ人主人公の Anna の Washington, D.C. での日常生活における様々な場面を通じて、アメリカ英語（口語）とアメリカ文化を学ぶことができる。言語学習方略（Language Learning Strategy Instruction（LLSI））を統合した初級レベルの自律的英語学習教材であり、各レッスンでは学習項目（資料 1 ）が示されている。本章では、LLE の全52レッスン（レベル 1 ）の中から、ニュースキャスターの Anna とディレクターの Caty（Ms. Weaver）とのニュース番組収録現場での会話が登場する「Lesson 18: She Always Does That!」の発話（テクスト 1 ）

において、登場人物が同じ場面を共有しているにもかかわらず、話し言葉と書き言葉が混在していることを SFL 的分析によって検証する。

4. 1. 言語使用域（register）

最初に SFL のレジスターの概念に基づいて、テクスト 1 の状況のコンテクストの 3 つの要素を考察する。レジスターは、誰がどのような状況で誰に何をするかについての観念を提示する「活動領域（field）」、誰と誰が何のために話しているのかについての立場の取り方を示す「役割関係（tenor）」、どのような手段で話しているのかによるテクストの構造を示す「伝達様式（mode）」の 3 つの要素によって同時に構築される。言語がどのように多種多様なコンテクストを具現するかを 3 つの変動要素の分析によって明示することが可能になる。

テクスト 1 は、登場人物 Anna と Caty（Ms. Weaver）の二人のみの発話で構成される口頭言語のテクストである。Anna と Caty のやりとりの場面であるレジスター(i)と、Anna がニュースを読み上げる場面であるレジスター(ii)において、話し言葉と書き言葉のレジスターが具現されていることを SFL 的分析によって検証するために 2 つのレジスターを節単位で表記する（表 1 ）。各レジスターの活動領域、役割関係、伝達様式の 3 つの変動要素の違いによって、異なった状況のコンテクストが具現されていることを以下のように明示することができる（表 2 ）。

4. 2. 語彙密度 (lexical density) と文法的錯綜性 (grammatical intricacy)

話し言葉と書き言葉は、テクストの総語数と内容語（名詞、動詞、形容詞、副詞）数との比率である「語彙密度」と、テクストの文と節の数との比率である「文法的錯綜性」の違いによって示すことができる。書き言葉は話し言葉よりも語彙密度が高く、話し言葉は書き言葉よりも文法的錯綜性が高いことが特徴である（Halliday, 1994: Eggins, 2004;

表 1　テクスト 1 における 2 つのレジスター

	節（Clause）番号
レジスター(i)	6–14, 20–30, 37–43, 48–55, 64–79, 86–96
レジスター(ii)	16–19, 32–36, 45–47, 57–62, 81–85

表 2　レジスター(i)／(ii)の状況のコンテクスト

	レジスター(i)	レジスター(ii)
活動領域	ニュース番組収録現場	ニュース番組
役割関係	上司（番組ディレクター）と部下（ニュースキャスター） 指示を与える	専門家（ニュースキャスター）と一般人（番組視聴者） 情報を伝える
伝達様式	口頭、対話的、対面（双方向）	口頭、権威的、非対面（一方向）

表 3　レジスター(i)／(ii)の語彙密度と文法錯綜性

	節＃	レジスター(i)		レジスター(ii)	
		語彙密度(%)	文法的錯綜性	語彙密度(%)	文法的錯綜性
(i)−1	6–14	66.67	1.1		
(ii)−1	15–19			50	1
(i)−2	20–30	59.46	1		
(ii)−2	31–36			53.33	1
(i)−3	37–43	53.57	1		
(ii)−3	44–47			46.67	2
(i)−4	48–55	45.1	1.1		
(ii)−4	56–62			46.88	2
(i)−5	64–79	45.1	1.2		
(ii)−5	80–85			53.33	1.5
(i)−6	86–96	42.22	1.2		
	平均値	53.02	1.1	50.04	1.5

（注）語彙密度はウエブサイト Analyze My Writing を使用（資料 2 参照）

Schleppegrell, 2004; McCabe, 2017）。分析の結果、レジスター(i)／(ii)の語彙密度の平均値は(i)の方が高く、文法的錯綜性は(ii)の方が高いことが示され（表 3 ）、この数値からすると話し言葉と書き言葉の特徴と一致し

ない。その理由として、1つ目にこのテクストが初級英語学習教材であるため本物のニュースで使用される言語とは異なること、2つ目に、ニュースの言語は書き言葉であると認識されるけれども、ニュースの内容によっては話し言葉に近くなる傾向があるかもしれないことが示唆される。この2点については、筆者自身の見解であり、今後の研究において検証すべき課題としたい。

4. 3. 主題進行（thematic progression）と結束装置（cohesive devices）

レジスター(i)／(ii)の言語的違いが最も顕著に表れているのが主題である（表4）。話し言葉と書き言葉の違いは主題（Theme）と題述（Rheme）の構造にも現れる（Halliday, 1994; Eggins, 2004; Schleppegrell, 2004; McCabe, 2017）。主題は、レジスターの活動領域における「経験的意味」と役割関係における「対人的意味」を線状（linear）に捉えた時に生じる、節における単語（語彙）間の配列である伝達様式の「テクスト形成的意味」を具現し、テクスト全体の首尾一貫性を構築する（龍城，2006）。すべての選択には動機があり、節頭に話し手の関心事が具現されるので、主題は、テクストの経験的意味、対人的意味へと聞き手を導く「旅の出発点」としての道標であり、題述は、その意味の方向性を示す「旅の目的地」となる（Halliday, 1994）。主題と題述の2つの部分に分割して統語構造を捉える分析法は、話し手と聞き手の機能的な観点にその基礎をなしており、機能主義の最たるものである（龍城，2006）。

主題は、典型的にテクスト形成的主題＾対人的主題＾話題的主題の順番で具現される。「話題的主題」は、過程構成の参与要素（名詞群）、過程中核部（動詞群）、状況要素（副詞節、前置詞群）によって構成され、最も大切な内容を示す。「対人的主題」には、呼称、モーダル、叙述表示的な要素が含まれ、「テクスト形成的主題」には、先行テクストとの関係が含まれる。以下の例では、経験的意味（誰がどこで何をしたか）と、

対人的意味（叙法、モダリティ）は同じであるが、主題（下線）が異なっている。文 2 、文 3 は、状況要素が主題となるため、主語（太字）は題述となり、有標として捉えられる。

主題	題述
1. **The lion**	beat the unicorn all round the town.
2. All round the town	**the lion** beat the unicorn.
3. By the lion	**the unicorn** was beaten all round the town.
4. **The unicorn**	was beaten all round the town by the lion.

(Butt, D. et al., 2000: 136)

主題の選択は、話し手が伝えようとする内容における大切な部分に焦点をあてることによって、テクストに語彙的、文法的な結束性をもたせる。結束性は、語彙的言語資源（反復、意味関係、等価、類似）と文法的言語資源（照応、接続、省略、代用）の結束装置（cohesive devices）によって具現され、テクストに首尾一貫性を与える（Halliday, 1994; Halliday and Hasan, 1985; Gibbons, 1991; Eggins, 2004）。

レジスター(i)／(ii)の主題分析の結果、両方のレジスターにおいて話題的主題が最も多く、呼称や叙法を具現する対人的主題は、(i)では24％であるのに対し、(ii)では 0 ％であり、(i)が呼びかけや疑問文が多い日常会話のコンテクストを具現していることが示されている（表 4 ）。

さらに、話題的主題分析の結果、(i)では、35％が過程中核部、つまり命令文が 3 割以上を占めており、ディレクター（Caty）がニュースキャスター（Anna）に指示を与えるコンテクストが具現されていることが示される（表 4 ）。一方、(ii)では、89％が参与要素、11％が状況要素であり、過程中核部は全くないことから、ニュース報道の目的である情報伝達が具現されていることが示される（表 5 ）。また、状況要素（In

表４　レジスター(i)／(ii)の主題分析

	(i)	(ii)
主題	54	19
テクスト形成的主題	10（18.5%）	0（ 0%）
対人的主題	10（18.5%）	0（ 0%）
話題的主題	51（24%）	19（18.5%）

表５　レジスター(i)／(ii)の話題的主題

	(i)							(ii)					
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	5	計
参与要素	5	6	4	2	10	6	33 (65%)	4	5	0	4	4	17 (89%)
過程中核部	2	3	3	3	4	3	18 (35%)	0	0	0	0	0	0 (0%)
状況要素	0	0	0	0	0	0	0 (0%)	0	0	1	1	0	2 (11%)
計	7	9	7	5	14	9	51	4	5	1	5	4	19

Indiana）が節頭に具現することによって、そのニュースの場所が強調されていると考えられる。

次に、文法的結束装置を分析することによって、２つのレジスターの特性を示す。照応の分析では、(i)は双方向的な対面の談話のコンテクストを共有する人称代名詞による外部照応が多いが、(ii)は一方向的な発話であるため、代名詞は全て前方照応であり、脱文脈的なニュース報道の情報伝達における書き言葉のレジスターを具現していることが明示される（表６）。また、テクスト形成的話題では、(i)においては、相手の発話に繋がりを持たせるために機能する接続詞が多いのに対し、(ii)では、ニュース報道の論理構成を示すシグナルワードとして機能している（表７）。省略・代用に関しても、(i)は(ii)と比較して80%以上多く具現していることから、話し言葉の特徴を顕示していることが分析結果により示

表 6　レジスター(i)／(ii)の照応の分析

	(i)	(ii)
前方照応／人称要素	0（ 7%）	10（43%）
前方照応／指示要素	5（ 9%）	8（35%）
外部照応／人称要素	23（42%）	0（ 0%）
外部照応／指示要素	11（20%）	0（ 0%）
自己照応	15（29%）	5（22%）
計	54	23

表 7　レジスター(i)／(ii)の接続詞の分析

	(i)	(ii)
逆接（but）	3（30%）	2（67%）
時（when）	2（20%）	1（33%）
追加（and, now）	5（50%）	0（ 0%）
計	10	3

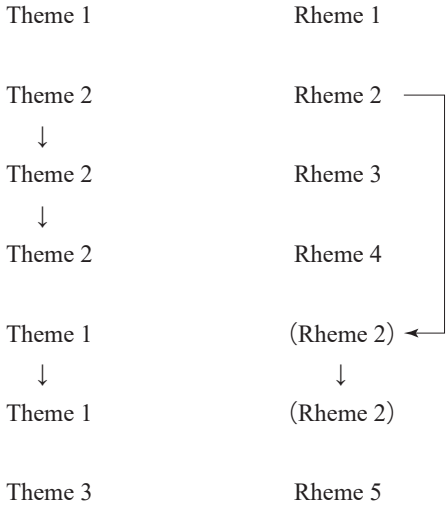
表 8　レジスター(i)／(ii)の省略／代用の数

	(i)	(ii)
省略	10	0
代用	2	1

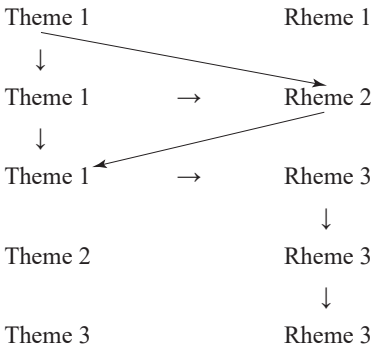
された（表 8 ）。

最後に、主題進行においてもレジスター間に顕著な違いが見られることを示すことができる。テクスト 1 の例はレジスター(i)−1における主題進行の場合、主題（Theme）は、発話の当事者（Anna − Theme 1; Caty − Theme 2; Anna and Caty − Theme 3）のみで進行している一方で、様々な題述（Rheme）が混在し、Rheme 2（read the news）が談話の主な関心事項であることが示される。一方、ニュース報道における書き言葉のレジスターを具現する(ii)−2は、新刊本（Theme 1 − A new book）とその主人公（Rheme 3 − a lost duckling）がニュースの関心事項であることが示さ

［レジスター(i)−1の主題進行］



［レジスター(ii)−2の主題進行］



れる。

このように、SFL 理論に基づいて、テクスト形成的意味を解釈構築する主題をさまざまな角度から分析することが可能となる。分析結果を数字、図式などで可視化することによって、テクストの語彙的・文法的言

語的特徴を明示することができるため、「主語－動詞」の統語構造と主題選択とを関連づけて、効果的にメッセージを伝達する方法を理解する手助けとなり、英語教育における応用が期待できる。

6．まとめと今後の課題

学生が身近に感じる話し言葉と学門的、社会的に必要とされる書き言葉の言語的特徴に対する意識を高めることによって、言語がどのように使用され、どのように機能しているのかを言語的側面と非言語的側面とを関連付けて認識できるようになることが、話し言葉に焦点を当てた言語的知識習得の意義であろう。そして、そのような言語的側面を理解するためには、語彙・文法規則の知識が必須である。

数年にわたり、筆者の担当授業の受講生の80％以上が英語学習の個人目標を「話す力、聞く力の向上」と回答している。多くの学生の英会話力を向上させつつ、上級リテラシーに必要な「読む力、書く力」を発達させるためには､話し言葉と書き言葉の間に優劣をつけるのではなく、それぞれの異なった種類の言語が、意思伝達において異なった目的を達成するために、異なった言語使用方法をするための語彙・文法によって構成されていることを可視化することによって学習者の理解を促すことが重要であり、高等教育や社会で必要な高度で複雑なテクスト構成を理解し、上級リテラシーや批判的思考力向上へと繋げるための有意義な言語知識となるにちがいない。

本稿では、SFL 理論に基づいた分析が話し言葉と書き言葉の言語的特徴を様々な観点から明示するための有効なツールとなり得ることが検証された。コンテクストとテクストの関連性に加えて、語彙・文法の選択によるテクスト構成の側面から話し言葉と書き言葉の違いを顕在化し、

言語が果たしている役割や機能に対する言語的意識を高めるための手助けとして、英語教育での応用も期待できる。今後の課題としては、今回の分析をもとに、話し言葉と書き言葉のテクストを SFL 的視点から比較分析することによって、主題の選択が結束装置と共にテクスト全体の首尾一貫性や論理的構成おいて重要な役割を果たしていることを検証したい。

テクスト 1． VOE Let’s Learn English! Lesson 18: She Always Does That!

主題－テクスト形成的主題／対人的主題／話題的主題
主語
結束装置
[1,2,3]照応：[a,b,c]接続詞：（　）省略：▷　◁代用：{{　}} 埋め込み節

レジスター	文 #	節 Cl#	
	1	1	Hello, from Washington, D.C.!
	2	2	Today at work **I** am reading the news for the first time.
	3	3	**I** am really nervous.
	4	4 5	But **my boss, Ms. Weaver**, is here to help me.
(i)–1	5	6	Now[a], Anna, **remember**.
	6	7 8	When[b] **we**[1] read the[(1)] news **we**[1] are always reading facts.
	7	9	**We**[1] never show our[1] feelings.
	8	10	Sure thing, Ms. Weaver.
	9	11	Great.
(i)–1	10	12	Are **you**[2] ready (to read the[(1)] news)?
	11	13	Yes I[2] am ready (to read the[(1)] news).
	12	14	Okay, **let ’s**[1] try the[(2)] first story!

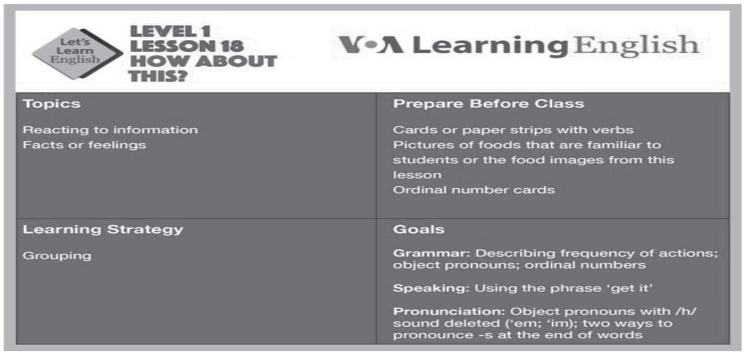
	13	15	Hello, and **welcome** to The News.
(ii)−1	14	16	**A new book**[3] is very popular with children and families.
	15	17	**This**[3] is it[3].
	16	18	**It**[3] is about a lost duckling[4].
	17	19	**The duck's**[4] **mother** cannot find him[4].
(i)−2	18	20	**Stop** !
	19	21 22	Anna, when[e] **you**[2] say the(3) words "duck" and "duckling" **you**[2] look really sad.
	20	23	**I**[2] do look sad ?
	21	24	**Yes** (you do look sad)
	22	25	**Sad** is a feeling.
	23	26	**Sad** is not a fact.
	24	27	Sorry.
	25	28	**Let** me[2] try again.
	26	29	Okay, **she**[2] 's trying again!
	27	30	And[d] **go**.
	28	31	Hello, and **welcome** to The News.
(ii)−2	29	32	**A new book**[3] is very popular with children and families.
	30	33	**This**[3] is it[3].
	31	34	**It**[3] is about a lost duckling[4].
	32	35	**The**(4) **duck's**[4] **mother** can not find him[4].
	33	36	But[e] **a family** gives him[4] a home.
(i)−3	34	37	**Stop**!
	35	38	Anna, **you**[2] are doing it[6] ▷showing emotion◁ again.
	36	39	**This**[3] **story** is very sad.
	37	40	**I**[6] have an idea.
	38	41	**Let's**[1] read the(5) second story.

(i)–3	39	42	**She**[2]'s reading the(5) second story.
	40	43	And[f] … **go**!
	41	44	Hello, and **welcome** to The News.
(ii)–3	42	45 46	In Indiana, **a grandmother**[7] is the(6) first 80-year-old woman {{to win The(7) Race Car 500}}[7].
	43	47	**That**[8] is awesome!
(i)–4	44	48	**Stop**!
	45	49	**Stop**!
	46	50	Anna, **please** (show) — no feelings.
	47	51	Right.
	48	52 53	But[g] it[8] is awesome that **an 80-year-old grandmother**[7] wins a car race.
	49	54	(You should tell) Just the(8) facts, Anna.
	50	55	Right.
	51	56	Hello, and **welcome** to The News.
(ii)–4	52	57 58	In Indiana, **a grandmother** is the(6) first 80-year-old woman to win The(8) Race Car 500[7].
	53	59	**She**[7] rarely talks to reporters.
	54	60 61 62	But[h] when[i] **she**[7] does ▷talk to reporters◁, **she**[7] often says, "**Nothing** can stop me[7] now!"
	55	63	**I**[2] am very happy for her[7]!
(i)–5	56	64 65 66	**Stop**, **stop**, **stop**!!
	57	67 68	Anna, **you**[2] cannot say {{that **you**[2] are happy}}.
	58	69	But[j] **I**[2] am happy.

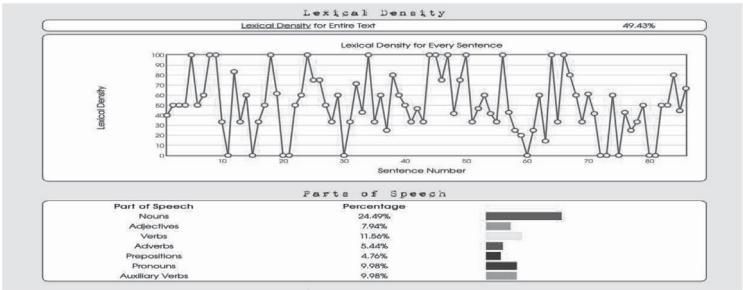
(i)–5	59	70	But[k] **you**[2] can't say it[9].
	60	71	**Why** (can't I say that I'm happy)?
	61	72	**This**[8] is the(1) News.
	62	73	**Happy and sad** are feelings.
	63	74	**You**[2] can't have them[9] in The(1) News.
	64	75	Okay.
	65	76	**I**[2] got it[10].
	66	77	Okay.
	67	78	**Let's** try the(9) third story.
	68	79	**She**[2]'s reading the(9) third story!
	69	80	Hello and **welcome** to The News.
(ii)–5	70	81 82	**City politicians in Big Town** are using city money to have a big party on a cruise ship.
	71	83	**They**[11] are taking the(10) money for the(11) party from the(12) children's library.
	72	84	**What**?!
	73	85	**That**[12] makes me[2] very angry.
(i)–6	74	86	**No**, no, no! (you can't say you are angry.)
	75	87 88	Anna, **you**[2] cannot say **you**[2] are angry!
	76	89	**This**[13] is The(1) News!!!
(i)–6	77	90	**What** can I[2] do, Ms. Weaver[6]?
	78	91 92	(I) Take out my(2) feelings and[1] (I) put them[14] here[15]… on the (13) news desk[15]?
	79	93	Yes, yes.
	80	94	**That**[16]'s right!
	81	95	Now you[2]'ve got it[16]!

(i)–6	82	96	**Let** **'s**[1] repeat **the**(2) first story.
	83	97	**This**[17] is going to be a very long day.
	84	98	Until next time!

資料 1　VOA Learning English Lesson 18 の学習項目



資料 2　Analyze My Writing による分析結果（抜粋）



References（参考文献）

石黒圭（2011）「話し言葉と書き言葉：初年次教育の基礎資料として」一橋大学『言語文化』Vol. 48，pp. 15–35

佐々木真（2006a）「英語の文法的比喩とその英語教育への応用について」『愛知学院大学短期大学部研究紀要』第14号，pp. 47–61

佐々木真（2006b）「ことばを教える」『ことばは生きている』龍城正明（編）くろしお出版，pp. 135−154

佐々木真（2009）「日本における SFL の英語教育への応用：5 文型と be 動詞を中心として」日本機能言語学会『Proceedings of JASFL』Vol. 3，pp. 73−84

龍城正明編（2006）『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』くろしお出版

山崎のぞみ（2017）「話し言葉に対する意識を高めるための言語活動の意義と方法：文法教材を調査を通して」関西外国語大学『研究論集』第106号，pp. 27−44

山本雅子、大西五郎（2003）「話し言葉と書き言葉の相互関係：日本語教育のために」愛知大学語学教育研究室『言語と文化』8，pp. 73−90

Butt, D., Fahey, R., Feea, S., Spinks, S. and Yallop, C. (2000) *Using Functional Grammar 2nd ed*. National Center for English Language Teaching and Research Macquarie University.

Christie, F. (1985) *Language education*. Deakin University. Oxford University Press.

Eggins, S. (2004) *An Introduction to Systemic Functional Linguistics. 2nd ed*. London: Bloomsbury.

Gibbons, P. (1991) *Learning to learn in a second language*. Newton: Primary English Teaching Association.

Halliday, M. A. K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar 2nd ed.* London: Edward Arnold.

Halliday, M. A. K. & Hasan, R. (1985) *Language, context and text: Aspects of language in a social-semiotic perspective*. Deakin University. Oxford University Press.

McCabe, A. (2017) *An Introduction to Linguistics and Language Studies. 2nd ed.* Sheffield: Equinox.

Robbins, J. (2018) *Teaching Language Learning Strategies With Technology*. In A. U. Chamot and V. Harris, Eds. *Learning Strategies Instruction in the Language Classroom: Issues and Implementation*. Bristol, U.K.: Multilingual Matters.

Schleppegrell, M. J. (2004) *The Language of Schooling A Functional Linguistics Perspective*. New York and London: Rutledge.

文部科学省 外国語教育 https://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/index.htm

Analyze My Writing https://www.analyzemywriting.com/index.html

VOA Learning English “Let’s Learn English!” − Lesson 18 https://learningenglish.voanews.com/a/lets-learn-english-lesson-18-she-always-does-that/3357748.html